求菩提山の開創と銅板経絵図私考

林　尚史

㈠　はじめに

福岡県東部の豊前市に位置する求菩提山は修験道の豊前六峰の一つとして数えられ、中世以降天台宗寺門派であった本山派修験の本山聖護院に属し、最盛期には五百余坊を数える一大修験道場であったと伝えられている。

求菩提山の開創については、江戸時代の文書『求菩提山雑記』(注1)に記している様に継体天皇二十年（５２６）猛覚磨ト仙が金光を尋ねて山頂に登り、国霊神の祠を建てて、祭祀したことにより求菩提山が開かれたと記されている。この猛覚磨ト仙は、災いを成す威奴嶽（犬ケ岳）の八匹の鬼（山霊）を呪術で甕に封じたとされる。

(注1)

「人皇廿七代　継体天皇即位より廿年丙午歳、猛覚磨ト仙と云もの此岳の金光に認て山頭ゟ攀登たりしゟ、頗　神明降霊の瑞相いちしるきか故ゟ、始て　顕国霊神の祠を建て是を祭奉る、是神霊此岳に鎮座し故始爰ゟ亦威奴嶽といふ峻嶺あり、山霊尤強暴ゟして国家ゟ害をなすが故ゟ、ト仙是を降伏し彼嶽の絶頂ゟ一つの甕を置八鬼をゟて悉く其霊を甕の中ゟ封し、」

『求菩提山雑記』は天保年間（１８３０年～１８４３年）に書かれた文書。『山岳宗教史研究叢書１８修験道資料Ⅱ　』西日本編所収　名著出版刊　昭和５９年

㈡　求菩提山と朝鮮の巫女信仰

求菩提山と朝鮮の民俗学に見られる巫女信仰の類似性から猛覚磨ト仙が巫女であった可能性について以下論じてみたい。

猛覚磨の表記は『求菩提山雑記』及び『求菩提山縁起』は磨の字を使用しているが、中野幡能氏の論文「求菩提山修験道の起源とその展開」においては、魔の字を使っている。ト仙の猛の解字は、猛々しい犬の意をあらわし、覚魔について『大漢和辞典』には覚魔子（chüeh² mo² tzŭ）という字句がみられ、“蒙古、西蔵の婦人の尼僧になったもの”を意味している。『求菩提山雑記』に見られる禍をなす鬼を甕に封じる習俗について三品彰英氏は巫女が悪霊を瓶や壺に封じる宗教的儀式が朝鮮に伝わっており、対馬においても村はずれの丘や小山の上に壺や瓶を御神体として祭祀する事例を報告している。(注2)

その事例を通して考えられることは、猛覚魔ト仙にみられる呪法に近似した形態が巫女を司祭者とした朝鮮の習俗に残っており、その源流として朝鮮半島伝来の可能性が考えられる。

『扶桑略記』(巻六)に、養老年間に九州南部で勃発した隼人の反乱について記載されている。これについて、民俗学者中山太郎氏は、禰宜の辛嶋勝代豆米は即ち刀自であるから、女性であった事は想像に難くないと評している。更に、我国の神道発達史、古代社会史、民族史の視点からも原始神道が巫女教であったことは、疑いのない事実であると記述している。(注3)

その証左の一つとして、『日本書紀』推古天皇三二年（六二四）九月丙子の条にも、僧が八一六人、尼が五六九人であるから、比率はほぼ六対四で、尼の比率がかなり高いと言えるであ

ろう。

これに関連して、田村圓澄氏は、尼の数が多いのは仏教伝来以前からのシャーマンの影響を指摘している。(注4)

『旧唐書』「新羅伝」武徳四年(六二一年)に"好祭山神"の文言が見られる様に、北部九州の修験道の源流が、山の神を祭祀する新羅の花郎(ファラン)道に由来していると、中野幡能氏は述べている。(注5)

『三国史記』新羅本紀巻第四真興王三十七年(五七六)春の花郎の記事(注6)によれば、花郎の担い手が男性となったのは新羅時代後期とされている。それまでは、母系社会を形成しており、三人の女王(注7)を輩出するなど、百済、高句麗その後の王朝では見られない特徴を有しており、当初女性が花郎集団の長で宗教的司祭者であり、かつ巫医であったと言われている。

中野幡能氏は新羅花郎の文化が彦山、求菩提山の周辺にも色濃く残っていたのではないかと推測している。(注8)

『日本書紀』(巻第八)仲哀天皇八年九月条には「眼災之金、銀、彩色、多在其国。是謂栲衾新羅国焉。」とあり、新羅は宝のある国であると記されている。金、銀等の表記が見られ貴金属の採掘、精錬においても技術水準が高かったことを伺わせている。

『日本書紀』(巻第二十九)天武天皇十一年(六八二)四月癸未に、「癸未。筑紫大宰丹比真人嶋等貢大鐘。」と記されており、大鐘の鋳造に関しては九州でしか製造できなかった可能性を示唆している。

国宝京都妙心寺と観世音寺の銅鐘は、鐘身の大きさ、形状がほぼ同一であることから、同じ工房で同じ時期に製作された兄弟鐘とされている。妙心寺鐘には文武天皇二年(六九八)糟屋評(現福岡県糟屋郡)の春米連広國が鋳造した鐘である旨の銘文が刻まれている。一方、観世音寺の鐘には「天満」、「上三毛」、「麻呂」といった線刻が施されており、上三毛とは豊前國上三毛(現福岡県築上郡上毛町)ではないかと推定されている。

二つの鐘の蓮華座、上下の唐草模様が豊前地方出土の新羅系瓦に見られる文様と酷似していることから、豊前地方の渡来系(新羅系)の技術者集団による製作と見られている(注9)。

『続日本紀』天平勝宝元年一二月丁亥の条に、大神杜女が八幡神の司祭者として、天皇と同じ紫色の輿で東大寺に参拝している記述があり、宇佐八幡の司祭者が禰宜尼であったことが記されている。ここでは大神杜女への破格の待遇に注目したい。聖武天皇が、河内の知識寺に行幸の折に、盧舎那仏造立を思い立ったが思うようにはいかず、八幡神の絶大な協力を得て大仏が完成されたと記している。

これは、豊前地方には、高度な製錬鋳造技術を有した朝鮮半島から渡来した鋳造技術を有したハイテク集団が存在し、その技術者集団が東大寺の大仏鋳造に大いに寄与した功績を含めた八幡神の御杖大神杜女への破格の待遇であったことが考えられる。(注10)

また、中野幡能氏は、頼厳の出自である辛嶋氏は代々巫女として八幡神に仕える家柄であるとしている。更に求菩提山に辛嶋氏の系譜を引く頼厳が中興の祖として入山した必然性についても言及している。(注11)

以上、豊前地方の新羅文化との深いつながりがある点を勘案すれば、求菩提山の開山である猛覚魔卜仙は、従来の呪術性の強い覡と捉える従来の視点に巫女、優婆夷であった可能性

も考えられる。

㊟2

「神を瓶の中にかりこめる（追い込める）という奇妙な話も、朝鮮の巫女が祭壇に壺を奉安し、それを神霊の依代ないしは容器としていることや、告祀（ko-sa）の呪儀すなわち悪鬼・病魔など敵意をもつ神霊を逐い払う時、神竿（神将竿ともいう）をもって逐い迫り悪霊を瓶や壺の中に追い込んで、これを封じて土中深く埋めたり川に流してしまうと言う呪儀から解説が出来る。また対馬では社殿のない神社が多く、村はずれの丘や小山の上に壺や瓶を御神体として奉安している実例の多いことも参考になるであろう。」

『増補日鮮神話伝説の研究』「応神と八幡神」（九四頁四行～九行）１９７２年　平凡社

㊟3

「（養老四年）九月、有征夷事。大隅、日向両国乱逆、公家祈請於宇佐宮。其禰宜辛嶋勝代豆米相率神軍、」（『扶桑略記』巻六）

中山太郎氏は『日本巫女史』（四六〇頁二〇行）において次の様に記している。

「而して禰宜の辛嶋勝代豆米は即ち刀自であるから、女性であった事は想像に難くない。」

更に同氏は同著（九八頁二行～三行）において、

「我国の原始神道が巫女教であったことは、神道発達史から見るも、古代社会史から見るも、民俗史から見るも、疑ふべからざる事実である。」と記述している。

『日本巫女史』中山太郎著（株）八木書店刊　昭和４９年発行

㊟4

「秋九月甲戌朔丙子。校寺及僧尼。具録其寺所造之縁。亦僧尼入道之縁。及度之年月日也。当是時。有寺四十六所。僧八百十六人。尼五百六十九人。并一千三百八十五人。」

『韓国と日本の仏教文化』学生社刊　鎌田茂雄共著　１９８９年発行（八九頁一〇行～一二行）において田村圓澄氏は以下の様に言及している。

「古代の日本では、尼寺が多くありました。尼の数が多かったのは、仏教伝来以前からシャーマンの伝統があり、その伝統の上に仏教が根を下ろした結果、尼の数が多いのではないか、とも思っています。」

㊟5

「花郎道の精神は、太白山、小白山、また白山神として、おもに北部九州に入って来たものと思われます。そのなかでも最も色濃く影響を受けたのが、英彦山であろうと私は考えています。特に田川郡、築上郡、京都郡、仲津郡という地方は秦氏が最も大きな勢力を持って殖産興業の文化に尽力していた地方です。その秦氏密集地と言われる田川郡にあって古来より霊山とされてきた彦山の周辺の人々には、この花郎道の精神は彦山修験道に大きな影響を与えたことが想像されるわけです。」

『韓国・壇君信仰と英彦山開山伝承の謎』（一一二頁五行～一〇行）（株）海鳥社刊　編者長野覚、朴成寿　１９９６年発行

㊟6

「三十七年　春　始奉源花　初君臣病無以知人　欲使類聚遊　以觀其行義　然後擧而用之　遂簡美女二人　一曰南毛　一曰俊貞　聚徒三百餘人　二女爭娟相妬　俊貞引南毛於私第　強勸

酒　至醉　曳而投河水以殺之　俊貞伏誅　徒人失和罷散　其後　更取美貌男子　粧飾之　名花郎以奉之　徒衆雲集　或相磨以道義　或相悦以歌樂　遊娯山水　無遠不至　因此知其人邪正、擇其善者、薦之於朝。…」

㊟7

善徳女王、真徳女王、真聖女王。

㊟8

『八幡信仰と修験道』（一八二頁1行～三行）中野幡能著　吉川弘文館　平成一〇年

「新羅の花郎集団と同じ類似性をもつ豊国の聖職者集団は、後の八幡の祭祀集団となっているが、もっと想像をたくましくすれば、「宇佐託宣集」にみる一三八年の間において、北部九州と新羅には同じような信仰集団があり、その人々の間では新羅との交渉がたえず行われていたのではなかろうか。」

㊟9

『京都妙心寺　禅の至宝と九州・琉球』西日本新聞社　二〇一〇年　二一二頁参照。

㊟10

「八幡大神祢宜尼大神朝臣杜女。其輿紫色。一同二乗輿一。拝二東大寺一。天皇。太上天皇。皇太后。同亦行幸。是日。百官及諸氏人等咸会二於寺一。請二僧五千一礼仏読経。作二大唐渤海呉楽。五節田舞。久米儛一。因奉二大神一品。比咩神二品一。左大臣橘宿祢諸兄奉レ詔白レ神曰。天皇我御命尓坐申賜止申久。去辰年河内国大県郡乃智識寺尓坐盧舎那仏遠礼奉天。則朕毛欲奉造止思登毛得不為之間尓。豊前国宇佐郡尓坐広幡乃八幡大神尓申賜閉勅久。神我天神地祇乎率伊左奈比天必成奉無事立不有。銅湯乎水止成我身遠草木土尓交天障事無久奈佐牟止勅賜奈我良成奴礼波歓美貴美奈毛念食須。然猶止事不得為天恐家礼登毛御冠献事乎恐無恐美毛申賜久止申。尼杜女授二従四位下一。主神大神朝臣田麻呂外従五位下。施二東大寺封四千戸。奴百人。婢百人一。又預二造東大寺一人。随レ労叙レ位有レ差。

㊟11

『古代国東文化の謎』（一六四頁一五行～一六行）中野幡能著　新人物往来社刊　昭和四九年発行

「八幡神が応神天皇を祭神にしない時代には、長く宇佐氏とともに原始八幡神に奉仕し、とくに巫女として宇佐氏を助けたことが、辛嶋氏系図に伝えられている。」

同著（一六六頁一四行～一七行）に、

「この氏族の中から、求菩提山中興開山といわれる頼厳がでたというのも、偶然ではなく、求菩提山は六世紀以来、辛嶋氏が最も力を入れてきた、宗教的拠点であったと推定するのである。宇佐五代の時代に国東に力を注いだ宇佐氏に対して、上毛・下毛を勢力圏に辛嶋氏は、再度藤原時代に、氏族の精力を傾けて力を注いだのが求菩提山であったろうと思われる。」

㈢　白山信仰の流入

『求菩提山雑記』に養老年間に白山信仰の流入を示唆している。(注12) そもそも白山権現信仰は、養老元年（七一七年）泰澄が白山の主峰、御前峰（ごぜんがみね）に登って禅定修行を修していた折に、緑碧池（翠ヶ池）から十一面観音の垂迹である九頭龍王が現われ、自らを伊弉冊尊の化身で白山明神・妙理大菩薩と名乗ったとされ、併せて白山修験が開創された。

白山を開創した泰澄について『元亨釈書』（巻十五）には、「釈泰澄姓三神氏越之前州麻生津人父安角母伊野氏夢白玉入懐而有孕…」とあり、『魏書』列伝の高句麗編に見られる朱蒙の誕生説話、『三国史記』（新羅本紀）に見られる昔、朴、金氏の誕生にかかわる朝鮮半島の卵生説話を彷彿とさせる。

鎌倉時代の成立とされる『白山大鏡第二神代巻一』(注13) に、泰澄の俗姓は秦氏であると記載されていることに注目したい。

中野幡能氏は、辛嶋氏について豊前国の北方に勢力を有した秦氏との関係を有する氏族であると指摘している。(注14)

また大和岩雄氏は、辛嶋郷は秦氏の根拠地とし、泰澄の出自が八幡神を祭祀する辛嶋氏と祖を一にする秦氏であったのではないかと主張している。(注15)

これに関連して、求菩提山における白山信仰について中野幡能氏は論文 (注16) に於いて豊前国における両白山信仰は中国、朝鮮との関連を指摘している。

以上の事柄から類推すれば、渡来系秦氏によって伝播された白山信仰について同一の基盤を有していた可能性を考なくてはならないであろう。

白山信仰の流入経路については中野幡能氏が主張する朝鮮半島から対馬経由で入ったルートと大陸から北陸に入ったルートがあったのではなかろうか。

更に、銅板経供養についても中野幡能氏は求菩提山の信仰と文化の土壌には朝鮮半島との関係が色濃く影響を与えていると指摘している。(注17)

(注12)
「四十四代、元正天皇養老四庚申年、白山大権現行善和尚に託して、霊石□影響し給う事あり、…（中略）…時に天女空中に現し、和尚に告げて曰、善哉大徳汝に妙法を授けし我は是白山権現也、汝か行化を助けんか為山海遥に来たり、」

(注13)
『山岳宗教史研究叢書17「修験道資料集」(1)東日本編』五来　重編　名著出版　昭和五八年
「越前国足羽南郡阿佐宇津渡守為秦角於父生古志路行者秦泰澄大徳」

(注14)
『古代国東文化の謎』（25頁10行～11行）において
「辛嶋氏族というのは豊前国（福岡県）の北方に勢力を有した秦氏と関係すると思われる氏族であり、…」

(注15)
『日本にあった朝鮮王国』（138頁16行）大和岩雄著　白水社　2009年1月

「辛島郷は秦氏系の辛島氏の本拠地だが、辛島氏はヤハタの神の祭祀氏族である。」

㊟16

「求菩提山修験道の起源とその展開」（129頁13行～16行）中野幡能　山岳宗教史研究叢書13『英彦山と九州の修験道』名著出版刊　昭和52年発行

「特に豊前の国における「両白山」信仰は古くは「太白山」「小白山」の信仰、つまり中国や、朝鮮の慶尚北道、江原道の境にある太白山、小白山の信仰で、その神も、太白山上に現われた桓因、恒雄、恒倹の三神に関係があるのではあるまいか。」

㊟17

『英彦山と九州の修験道』（14頁4行～7行）山岳宗教史研究叢書13「英彦山と九州の修験道」　中野幡能　名著出版刊　昭和52年発行

「このような銅板経による経塚供養は日本には他に類例がなく、九州でも東九州に限られいる点も注目しなければならない。しかし、銅板を宗教的に使用する事については韓国にはその例が多い。たとえば、全羅南道釜山大宮里から出土した金板経は八世紀の統一新羅時代のものであり、ソウル中央博物館には多数保存されている。このようにみると銅板　を造るという考え方も技術も、朝鮮半島からのものであったろうと考えざるを得ない。」

㈣　求菩提山と隼人の反乱

求菩提山護国寺が創建された養老四年（720）には、大隅日向両国で隼人族の大規模な反乱が勃発している。「扶桑略記」巻六に、

「養老四年九月、有征夷事、大隅日向両国乱逆、公家祈祷於宇佐宮、其禰宜辛島勝代豆米、相率神軍、行征彼国、打平其敵、大神託宣曰、合戦之間、多致殺生、宜修放生者、諸国放生会、始自此時矣。」

とあり、求菩提山とゆかりの深い宇佐神宮からは辛島勝代豆米が神軍を率いて戦地に赴いたことが記載されている。

大隅国一宮である鹿児島神宮では隼人の霊を鎮めるために隼人塚の建立や放生会がおこなわれたとの伝承や宇佐の八幡神が戦場で傀儡子を舞わせて勝利した故事に因んで古要神社の古要舞、神相撲の神事が始まったといわれている。

いずれにせよ、大隅日向における隼人の反乱は、朝野を大きく揺るがした事件であったことが考えられ、隼人の反乱が勃発する六年前の『続日本紀』には、

「《和銅七年（七一四）三月壬寅（十五）》。壬寅。隼人昏荒。野心、未習憲法。因移豊前国民二百戸。令相勧導也。」

とあり、豊前国からの移住が国策として行われたことが読みとれる。その移住に際して八幡神の信仰も付随したのではなかろうか。鹿児島県神社庁のホームページ韓国宇豆峯神社の開創について、

「創建年代は不詳であるが、続日本紀に大隅国設定の翌年・和銅七年に豊前国から二百戸の民を隼人教導のため移住させたとあり、その移住者たちが国家鎮護として建立したものとも伝えられる。延喜式神名帳に「大隅国囎唹郡韓国宇豆峯神社小」と登載の古社である（大隅国式内社五社の一つ）。宇佐記によれば、「欽明天皇三十二年（五七一）癸卯二月豊前国宇佐郡菱形池の上小椋山に鎮祭、のち当地宇豆峯（現在、宇土門）の絶頂に奉遷鎮斎され…」

とあり、肉親縁者の危急存亡の危機意識が豊前地方にあったことは想像にかたくない。そのため大隅国に八幡神を奉じて向ったのも一因ではあるまいか。その伏線が求菩提山護国寺創建へとつながった可能性も考えなくてはならない。

㈤　求菩提山銅板経図について

我国の浄土思想は平安末期、末法の世の到来は経典を地下に埋納して経塚を造営し、作善の一つとしての埋経が行われるようになる。その嚆矢として覚弘四年（１００７）藤原道長が大和国金峰山山頂に造営した金峰山経塚があげられる（㊟１８）。近畿地方に端を発した経塚造営の風習は九州にも伝播し、近畿、九州はともに経塚の二大密集圏を形成している。

このことに関して、小田富士雄氏（㊟１９）、八尋和泉氏（㊟２０）は、九州は埋経の一大中心地であり、その遺品もバラエティに富んでいると報告している。

本稿で取り扱う銅板経で現存しているのは、求菩提山出土銅板法華経・銅筥（福岡・国魂神社蔵）と豊後高田市の長安寺所蔵のもののみである（㊟２１）。

求菩提山出土の銅板経は縦二一糎、横一九糎、厚さ二粍の寸法の銅板三十三枚に法華経と梵文般若心経を刻んだものから構成され、末尾に以下の銘が記されている。

「康治元年壬戌（才次）九月廿四日書写畢
大勸進金剛佛子頼嚴　小勸進僧勢實
執筆僧嚴尊但九枚　此他五人　千慶　余太
良仁　隆鑒　隆胤　鋳物師義元」

同銅筥は、高さ二一、四糎、幅二一糎と一二、八糎。この中に三十三枚の法華経等の経文が納められていた。筥の二つの大面にはそれぞれ阿弥陀如来三尊、釈迦、薬師（他説あり）の二尊が、小面にはそれぞれ不動明王、毘沙門天の図像であろうと近年では言われている。毛彫りされている尊像については、不動明王、毘沙門天については特徴的な図像様式から考えて異論はないと見られるが、他の前面の三尊像、背面の二尊像については種々の説がある。市場直次郎氏の論文『求菩提山銅板経図像私考』（㊟２２）に諸説についてまとめられているので、引用したい。

前面の三尊像について。

一、中央不空成就如来、左右脇侍聖観音。（「求菩提山国宝銅板経」解説―求菩提山保勝会）

二、転法輪の釈迦三尊。（「日本国宝全集」第五輯解説。「福岡県重要文化財解説国宝篇」―檜垣元吉・森克己氏）

三、転法輪の阿弥陀仏と観音・勢至の三尊。（「我国発見の銅板経に就いて」―石田茂作氏。）

「筑紫の文化」（毎日新聞、昭二九、七、二）―谷口鉄雄氏）

背面の二尊像について。

一、向かって右は不空成就如来、右は薬師如来。（「求菩提山国宝銅板法華経」解説）

二、釈迦及び薬師如来。（「福岡県常用文化財解説国宝篇」。「我国発見の銅板経に就いて」）

三、釈迦と多宝の二仏併坐。（「日本国宝全集」。「毎日新聞」筑紫の文化）

の諸説が挙げられている。これら問題の尊像についての論考は後述したいと思う。

底板には供養銘が以下の如く記されている。

「奉彫如法妙法蓮華經一部　求菩提山供養畢

大勸進頼嚴　小勸進勢實

康治元年十月廿一日供養畢

同日堂供養了　大勸進雅財

十二神將勸進行賀

貢上　紀長雅

御馬所檢校紀重永　大中臣三子」

とある。

写経の嚆矢について、池山一切圓師は、そのルーツを慈覚大師の故事（㊟２３）に求められるとしている。（㊟２４）

こうした慈覚大師の事跡をふまえれば、天台宗の本場で研鑽した求菩提山中興の祖であり銅板経の大勧進頼厳も宗門の故事を当然承知しており、三十三天の加護を三十三枚の銅板になぞらえて法華経八巻を鐫刻した可能性が推測される。

田口榮一氏も論文「銅板法華経・付銅筥板」（㊟２５）において、その制作には法華経二十八品、金剛界三十七尊の顕密の教理が裏付けになっている旨を述べている。

以上の点を勘案すれば、求菩提山出土の銅板法華経にも同様な事が推定できると考える。

本稿の主題である求菩提山普賢（胎蔵）窟出土の銅板経の発見については、「大内義興行人連状」（㊟２６）に記載されている。

それによると、大内氏の戦勝祈願中、頼尊大徳の夢告により、銅板法華経が普賢（胎蔵）窟で発見された旨が書かれており、大永三年（一五二七）十一月三日付で大内氏より求菩提山衆徒に提出された文書である。

ここにある大勧進頼厳について『求菩提山縁起』（㊟２７）「求菩提山縁起」求菩提山祐官坊祐瞬は、園城寺長吏行尊大僧正について修験の奥儀を極め、比叡山において顕密を修めて融通念仏の開祖良忍、肥後阿闍梨皇圓という当時の天台の大碩学の教えに接したと記述している。

良忍は、融通念仏を始め、皇圓は法然の師僧であり、弥勒出生まで遠江匡桜ケ池に至り大蛇に身を変えた伝承がある点から頼厳も浄土信仰、弥勒信仰の下地を継承していたであろう。頼厳の経歴を考えると、地方修験という範疇におさまる人材ではなく、正統派の天台密教を修めているところに注目したい。

台密の中心経典は東密の『金剛頂経』『大日経』の両部構成に対して、両部の大経に『蘇

悉地経』を加えた三部の構成となっている。特に、『蘇悉地（羯羅）経』は、天台密教三部秘経の中の教王として最も重要な経典として位置付けられている。

蘇悉地羯羅とはsusiddhi-kāraの音写語でsuは〝よき、妙、善、易い、いと〟を意味する。接頭辞、siddhiは女性名詞で〝成就、神通力〟、kāraは男性名詞で〝行為者、手、象鼻或いは光明〟の意味があり、妙成就作業と漢訳されている。こうしたことを勘案すれば、〝一切の世間、出世間の作業をよく成就すること〟と解釈できそうである。

胎蔵曼荼羅虚空蔵院に配されている蘇悉地羯羅菩薩が成就の徳を司る働きをする菩薩としての性格から類推すれば、『蘇悉地羯羅経』とは、世間、出世間の一切の作業を成就する経典と解釈でき、この経典が解き明かしている法則に従うことによって諸仏諸尊に祈祷すれば、願望を成就できる経典と言うことで台密では古来重要視されてきた。

この経典のいわば解説書である『『蘇悉地羯羅経略疏』』（円仁撰　七巻）巻第二に

「若明處者。應指普賢宮。即須彌山頂。金剛手所住。無非普賢宮故也」

とある。『蘇悉地（羯羅）経』とその注釈書である『蘇悉地羯羅経略疏』を概説すると、金剛手（金剛薩埵、普賢菩薩）が、大日如来の教えを継承して、須弥山山頂の普賢堂において、忿怒軍荼利に真言行の諸の儀軌等について四一の質問を受けるという内容である。

求菩提山の銅板経が、『蘇悉地経』の経意を汲んだ上で、大日如来から金剛薩埵への密教の相承の意味を込めて普賢窟に埋納されたことが推測できる。こうしたことから、頼厳の意図に台密の深い素養が働いての埋納と想像される。

銅筥に線刻された尊像は、毘沙門天像、阿弥陀三尊像、不動明王像、釈迦如来像・薬師如来像（二仏坐像の説あり）とされている。

このような尊像が、平安時代末に於いてどのような意味合いを持っていたのか、若干時代は下るが、ほぼ同時代の天台座主慈円の宗教思想の真髄を要約した著作と言われる『本尊縁起』（一巻）（㊟２８）に、

「大日者尺尊也、此尺尊者薬師如来也…（中略）…過去尺尊現在薬師未来弥勒□
法之声塵也」

とあり、大日如来は釈尊と同体であり、釈尊は薬師如来と同体という三位一体の関係にあり、過去仏としての釈尊、現在仏としての薬師、未来仏としての弥勒と言う構成である。

「尺尊仮名字於薬師播利生於滅後」

とあり、釈尊は名前を薬師に仮りて入滅後に衆生に利益を施すとしている。つまり、薬師は釈迦滅後弥勒出現までの間の無仏の世における現世救済の姿であるということであろう。

「不動明王者密教降魔也、毘沙門天王者顕教之降魔也」

とあり、不動明王は密教即ち大日如来の教えを守護し、毘沙門天王は顕教即ち釈尊の教えの

守護者であると記している。
　また、毘沙門天の持っている宝塔は『法華経』の「見宝塔品」に説かれている多宝塔を意図していると考えられる。不動、毘沙門の二尊は、天台宗の古刹では脇侍としてしばしば見られるが、これは顕教と密教を両建てとする天台教学に裏打ちされたものであろう。銅筥に線刻された不動、毘沙門もこの様な意図が推定される。
　銅筥背面に描かれた尊像については、釈迦如来像もしくは不空成就如来像と薬師如来像もしくは多宝如来像の説がある。
　不空成就如来に就いて『密教大辞典』には、

「四方四仏の一にして金剛界曼荼羅北方の月輪に住し、釈迦仏と同体なり。」

とあり、釈迦如来と同体と記しており、顕教の釈迦を密教でとらえた尊格が不空成就如来と考えられ、異なったものではないとしている。『法華経』見宝塔品に説かれる釈迦仏と多宝仏との並坐であるという説について、『阿娑縛抄』巻七十一法華法本（㊟２９）に、

「多寶如来入禅定尊左也。釈迦説法主是智右也。定左。慧右可居事也。一釈迦左。多寶右。多寶自本座塔中。釈迦後入塔座。仍准世間客人令坐左。世以左為上藹。是饗応意也云々」

とあり、位置関係での特定は困難である様に思われるが、長谷寺銅板法華説相図は釈迦、多宝の二仏並坐であることが銘文等で特定できる。片岡直樹氏は、論文「長谷寺銅板法華説相図考」（㊟３０（１５頁上段３行～６行）において、

「古くから奈良・長谷寺に伝わるいわゆる「銅板法華説相図（千仏多宝仏塔）」は、『法華経』見宝塔品に基づき、中央に三層六角の多宝塔を鋳出し、塔の周囲には多数の仏菩薩を配し、その下部に銘文を刻んだものである。」

と述べており、見宝塔品は多宝如来が出現し、釈迦の説く法華経を正しい教えである証明するストーリーであり、描かれている場面も釈迦、多宝が中心であり、銘文にも“天皇陛下、敬造千佛多寶佛塔。上厝舎利、仲擬全身、下儀並坐”とあることから、二仏併坐が経典の趣旨と図から認識できる。
　また、大分県津波戸山出土経筒の銘（㊟３１）に

「…如法図摺仏菩薩各百体宝塔一基　於中安置釈迦多宝二世尊像、左右扉普賢文殊種子書之　永保三年九月廿二日於津波戸山供様之…」

とある。いずれも二仏並坐の例があげられる。
　求菩提山出土の銅筥底板の銘に“…康治元年十月廿一日供養畢　同日堂供養了　大勸進雅財　十二神将勧進行賀”とあり、（薬師）十二神将を勧進により造立し、供養を執り行ったと記載されていることから、薬師如来の開眼供養も行われたのではなかろうか。

『彦山流記』（㊟３２）に、

「第十　求菩提山、守護神、二所権現、本尊薬師如来并十二神将…」

と記載があり、求菩提山の本尊が薬師如来であることがわかる。求菩提山々内をあげての事業であった銅板経の制作と言う視点からも一山の本尊を銅筥に描かないことは通常ありえないだろう。先述の慈円の筆とされる『本尊縁起』においても、釈迦入涅槃の後、弥勒出世の間、薬師が衆生を救済する考え方が示されていることは、当時の天台宗の学侶の間では、共通の認識であったことが伺える。平安後期に良忍、皇円と言った大学僧の法筵に侍った頼厳にも、そうした宗教的センスを有していたと考える方が妥当であろう。

また、左手に載せられている持物は、薬壺でなく宝珠との説もあるが、「阿娑縛」第四十六薬師本に

「一。左掌持宝珠。通仏…印抄云。伝教大師於鎮西為度海安穏所造四体像。皆左手持珠。義釈初無之。」

とあり、左手に宝珠を持した薬師仏が伝教大師によって造られた記載があり、薬壺、宝珠いずれの持物も薬師が持する可能性を示している。宝珠を持していることから、多宝如来とするのは無理があるのではなかろうか。以上のことから、毛彫りされている尊像は多宝如来ではなく、薬師如来と考えたほうがよいのではなかろうか。

次に、釈迦如来坐像と想定される仏の印相に注目したい。（左手を内側に向けた相にも見えるが、ここでは両手開白の説法相として論を進める）同一の印相を結ぶ釈迦如来は、『曼荼羅集』巻中の「菩提場荘厳経曼荼羅」（㊟３３）と同じく「祈雨大曼荼羅」（㊟３４）に見ることができる。

（菩提道場荘厳経曼荼羅）

（菩提道場荘厳経曼荼羅中尊拡大図）

「菩提場荘厳経曼荼羅」（『大正新脩大蔵経・図像篇第四巻』一七五頁下段一〇行）には、

「釈迦牟尼仏上又畫一仏作説法相。」

（祈雨大曼荼羅）

（祈雨大曼荼羅中尊拡大図）

「祈雨大曼荼羅」（『大正新脩大蔵経・図像篇第四巻』一七七頁中段四行）にも、

「於龍宮中有釈迦牟尼如来説法相。」

と記しており、両者とも説法相（二手開白）である。

「菩提道場荘厳経曼荼羅」を本尊として修する菩提経法は、『菩提荘厳曼荼羅経』の所説に基づいて、罪障消滅、悉地成弁の為に修せられる修法である。

「菩提場荘厳経曼荼羅」について、『阿娑縛抄』第八十二「菩提場経経軌事」に、

「経に云はく、此のダラニは能く一切の悉地を与へ、能く一切の罪障を消滅し、所作の一切の事業通達無礙なりと。釈迦牟尼仏を本尊とし、釈迦法に依りて修するなり。図像抄第三、別尊雑記第十四、曼荼羅集巻中（興然）、阿娑縛抄菩提場経等に図出する所にして、菩提場曼荼羅と称せらる。」（『望月仏教大辞典』より）

とあり、大乗の教えや聖人をそしり、五無間罪に堕ちるべき者もこの仏像を描くことによりその罪障が消滅すると説き、またこの曼荼羅に入る者は一切の罪障を消滅し、一切の悉地を成就し、不退転地を得、一切の鬼神も侵さず、一切諸天悉く擁護すると、その功徳が説かれている。この修法の利益を考えるならば、釈迦像とも考えられる。

銅筥前面の三尊像については、不空成就如来（釈迦如来）と聖観音との三尊説、釈迦三尊説について、『観無量寿仏経』（注35）の十六観の十観に観世音菩薩色身想、十一観に大勢至菩薩色身観に次の様に説かれている。

「頂上毘楞伽摩尼妙宝。以為天冠。其天冠中有一立化仏。高二十由旬」

「頂上肉髻如鉢頭摩花。於肉髻上有一宝瓶。盛諸光明普現仏事」

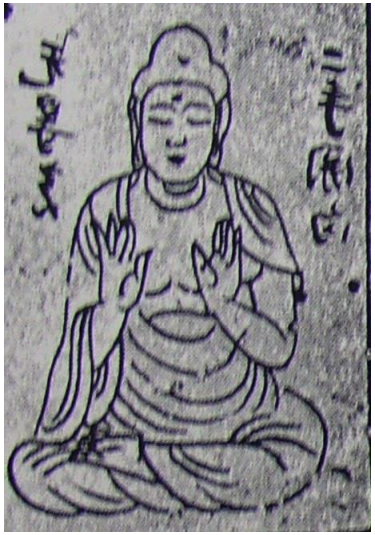
同経の第八観に、

「想一観世音菩薩像坐左華座。亦放金光如前無異想一大勢至菩薩像坐右華座。」

とあり、観音の化仏、勢至の宝瓶、それぞれの立ち位置を示している。求菩提銅板にある阿弥陀三尊と推定される尊像については、脇侍の二体の菩薩像の内、左側の菩薩像を拡大すれば市場直次郎氏の論文「求菩提山銅板経図像私考」の（註）５に示している谷口鉄雄氏指摘の通り宝冠に化仏がみられる。両脇侍は観音、勢至と考えられるが故に阿弥陀如来とするのが妥当であり、阿弥陀三尊であると考えられる。

阿弥陀如来の印相は二手開白で、説法相である。この印相は、『諸尊図像巻上』の「往生曼荼羅」（㊟３６）、『別尊雑記』巻第五「阿弥陀」の九品曼荼羅（㊟３７）に見られる。両図とも向かって左端に位置しており、前者は无碍光、二手開白、後者は无碍光三と記されている。

（往生曼荼羅）



（往生曼荼羅無礙光拡大図）

（九品曼荼羅）

（九品曼荼羅无碍光拡大図）

无碍光如来とは、『無量寿経』の説く阿弥陀如来の光明を十二種に分かった徳号の一つであり、一劫に一仏が出現すると言われている。

この光明に照らされることによって煩悩が消滅し、心身ともに安らぎを得て三悪道の苦しみを除くと言われている。また、无碍光如来は“人法よく遮るものがない徳性を持っている”と言われている。

（㊟求菩提山出土の銅筥に描かれた図像は全て『古代九州の国宝』（平成２１年発行　九州国立博物館編集発行）より転載している。）

（富貴寺大堂本尊阿弥陀如来座像）

求菩提山銅板の三体の如来像、富貴寺大堂本尊阿弥陀如来座像の肉髻珠、胸部、腹部の線、衣紋線の状態、衲衣を褊袒右肩に巻いており、背中の衲衣を引き上げて右肩にかけている点において近似しており、共通した図像によって作成されたものではなかろうか。この様な点から求菩提山は、宇佐国東と同一の仏教文化圏に属していると推定される。

覚弘四年（１００７）藤原道長が大和国金峰山山頂に造営した金峰山経塚から出土した自筆経巻は、「妙法蓮華経一部八巻無量義経観普賢経各一巻阿弥陀経一巻弥勒上生下生成仏経各一巻般若心経一巻合十五巻」とされている。

法華経の願意は、「為奉報釈尊恩為値遇弥勒親近蔵王為弟子無上菩提」阿弥陀経の願趣は「為臨終時身心不散乱念弥陀尊往生極楽世界」弥勒経の願趣は、「為除九十億劫生死之罪證無生忍遇慈尊之出世」最後に、『仰願当慈尊成仏之時自極楽界往詣仏所為法華会聴聞受成仏記其庭此所奉埋之経巻自然涌出令会衆成随喜矣』と銘文（㊟３８）に記している。

法華経は、“釈尊の（仏）恩に報い、弥勒に値遇し、蔵王に親近せんがため、そして弟子の無上の菩提の為”とし、阿弥陀経は、“臨終の時身心散乱せず、弥陀尊を念じ、極楽世界に往生せんが為“、弥勒経は九十億劫の生死の罪を除き、無生忍を證し、慈尊の出世に遇はんが為“、最後に、“慈尊成仏の時に当りて、極楽界より仏所に往詣し、法華会聴聞のため成仏記を受け、その逝（庭）にこの奉埋する所の経巻、自然に湧出し、会衆をして随喜を成さしめん”

と記している。

願意をまとめると、釈尊の仏恩に報い、弥勒と仏縁あってめぐり会う、極楽世界に往生する事、弥勒仏が出現した折には弥陀の極楽世界から、弥勒仏の説法の場に参拝するというこ

とであろう。

藤原道長による埋経とほぼ同時代、長保二年（一〇〇〇）に性空により創建された兵庫県姫路市の弥勒寺の弥勒如来座像は長保元年（九九九）の作とされ、その銘文（注３９）には、

「仍現世□年恣栄楽後生三会遇初回□之間往詣兜率極楽遊戯十方世界」

と記されており、極楽への往生を足がかりに弥勒仏の出世の折にはその説法がなされ救済される龍華三会への参詣が当時の仏教徒の大きな願いであったが伺われる。

『法華経普賢菩薩勧発品』（注４０）には法華経を受持読誦し、その経意を理解すれば死後千仏に導かれて弥勒菩薩のいる忉利天に往ける。弥勒菩薩は（如来の）三十二相を有しており、大菩薩衆周りを囲み、百千億の天女や眷族がいる。その中に生まれることが出来る。（法華経は)この様な功徳利益があるので人にも書写し人にも書かせるべきである。受持読誦憶念して修行すべきである。と、説かれており法華経信仰の中に弥勒信仰が包含されおり、写経を重視していることが読みとれる。

『観彌勒菩薩上生兜率天經』（注４１）には、煩悩を断じ得ない凡夫であっても瞑想修行をなさず煩悩を断じていない出家者であっても死後に兜率に生じる、と説いており、弥勒信仰は在家あるいは求菩提山に見られる半僧半俗の修行者にとって受け入れやすい教理であると考えられる。

『八幡宇佐宮御託宣』集（以後託宣集と表記する）神亀２年（７２４）一月二七日の託宣に、勅定により弥勒禅院・薬師勝恩院を大神比義が建立とある。

「神吾未来の悪世の衆生を導かんが為に、薬師・弥勒二仏を以て、我が本尊と為す。…」

『託宣集』天平九年（７３７年）四月七日の条には、弥勒寺禅院を遷し、弥勒寺建立とある。

「我当来の導師弥勒慈尊を崇めんと欲ふ。伽藍を遷し立て、慈尊を安ゑ奉り、一夏九旬の間、毎日慈尊を拝み奉らん」

とあり、八幡神の帰依の対象は弥勒、薬師であることが述べられている。宇佐八幡宮の神宮寺である弥勒寺の金堂の本尊が薬師、講堂の本尊が弥勒であることが、その証左となるであろう。

（弥勒寺金堂本尊薬師如来注４２）

（弥勒寺講堂本尊弥勒菩薩注４３）

八幡神は未来悪世の衆生を導く為に、薬師と弥勒の二仏を八幡神の本尊とし一夏九旬弥勒を拝むと、託宣している。縷々述べてきた平安期の信仰形態と八幡神の託宣を考慮すれば、宇佐八幡の同一信仰圏に属する求菩提山出土の銅筥に描かれた尊像は薬師と釈迦の組み合わせとみる以外に、薬師、弥勒であるとも考えられる。

釈迦、弥勒の無仏中間にあって、衆生を救済する仏である薬師と五六億七千万年後の未来仏弥勒が手印を説法相にして龍華三会の法を説いている姿とも想像できる。

大江匡房による『続本朝往生伝』〈十六〉真縁上人の項（㊟４４）に、

「爰知。生身仏即是八幡大菩薩也。謂其本覚。西方無量寿如来也。真縁已奉見生身之仏。豈非往生之人乎。」

とあり、八幡大菩薩の本覚を無量寿如来と記している。

また、『諸社根元記』（㊟４５）によれば、石清水八幡宮は、祭神応神天皇、神功皇后、玉依姫とし、その本地仏を阿弥陀　観音　勢至と記している。

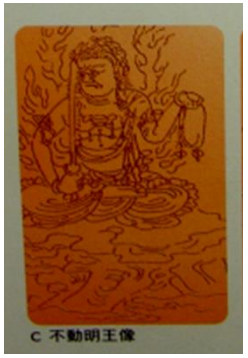
求菩提出土の銅筥に線刻されている阿弥陀三尊像は、本地垂迹説に基づいて、本尊阿弥陀如来に応神天皇、観世音菩薩に神功皇后、勢至菩薩に玉依姫を配していると考える。

銅筥に彫られた不動明王像について考察してみたいと思う。次に、不動明王について、胎蔵図像、胎蔵旧図様、現図、求菩提銅板の図像を示しておく。

（胎蔵図像）

（胎蔵旧図様）

（現図）



（求菩提銅板）

『諸説不同記』は、

「或図剣有光焔。左手屈臂開肘仰掌指端向左持索。面向右方。坐盤石上。」

とあり、求菩提銅板経にみられる不動明王の剣の周囲に光焔と思しき線刻が見られる点、左手の臂（肩から手首）を屈して肘（関節部分）を開き、掌の指端を仰ぎ、左に羂索を持している等、宗叡請来の或図との関係性は如何であろうか。概ね胎蔵旧図様に近い様に感じられる。今後の研究が待たれる。

求菩提銅板経に線刻されている毘沙門天について胎蔵図像、胎蔵旧図様、現図との比較を行ってみると、

（胎蔵図像）

（胎蔵旧図様）

（現図）

（求菩提銅板）

『諸説不同記』に毘沙門について次の様に記述している。

現図在門之東。金色。被甲著帯。二端繫肘上自内外屈曲至座前。著冠有繒。或図在耳璫。右手向内當腰側持棒。或図当嬭。左手仰掌指頭向左掌持宝塔。或図竪左膝而交坐。面少左少怒目。無光。或図有頭光。私云。毘沙門眷族闕

求菩提山銅板に描かれている毘沙門天と胎蔵図像を比較してみると、前者は背中に火焔を背負い甲をかぶっている。後者は頭光にはフレア状の火焔がみられ、甲状のものをかぶっているようである。求菩提山銅板、胎蔵旧図様、現図ともに右手に宝棒、左手に多宝塔を持している点は共通している。胎蔵図像は、右手に独鈷、左手に槍（寶珠状の柄）の棒を持している。或図については、『諸説不同記』の記述内容と胎蔵旧図様に比肩出来るのではなかろうか。何れの図像も、地方の独自の作とみるよりも中央の儀軌にその所依を求めることが出来るのではなかろうか。

銅筥に彫られている不動、毘沙門の配置は、『本尊縁起』に記載されている様に、仏の聖域を守る密教の降魔を不動明王、顕教の降魔を毘沙門天として意図しての配置であろうから、天台教学の流れをくんでいるものと考えられる。

また、八幡宮の祭神である、応神天皇、神功皇后、比売大神は本地垂迹説の視点から見れば、それぞれ阿弥陀、観音、勢至に該当し、そうした宗教思想をもとに阿弥陀三尊として描かれているのではなかろうか。

背面に描かれた二尊仏については、一尊は薬師であろう。他の一尊は釈迦であっても図像的には間違いはないと考えられるが、ただ、八幡信仰という宗教思想の面から推察すれば、『託宣集』に見られるように、八幡神の帰依の対象は、薬師、弥勒であり、弥勒寺の金堂本尊、講堂本尊として祭祀されている点を考慮すれば弥勒であると考えられる。

『彦山流記』にも、彦山は弥勒の兜卒浄土と位置付けられ、その周囲には兜卒浄土四十九院を模した四十九窟が配され、求菩提山はその第十窟にあげられており、弥勒浄土の一角を占めている点を考慮すれば、弥勒である可能性が十分考えられる。そうした事跡を考慮すれば、描かれた尊像は、天台思想と八幡神の宗教思想が重層的かつ複合的にリンクし、そのエッセンスが凝縮された形で図像として表現されていることから、薬師、弥勒と考える。

㊟１８、「金峯山経塚遺跡の研究」石田茂作・矢島恭介　東京帝室博物館学報第八　１９３７年

㊟１９『小田富士雄著作集Ⅰ　九州考古学研究歴史時代篇』昭和５２年　学生社

㊟２０、『別府大学文化財研究所企画シリーズ①』「ヒトとモノと環境が語る」経筒が語る中世の世界　思文閣出版　二〇〇八年

㊟２１、『古代九州の国宝』九州国立博物館　平成２１年　２９頁参照

㊟２２、「求菩提山銅板経図像私考」市場直次郎　『考古学雑誌』四十巻三号　昭和二九年所収

㊟２３、『続群書類従』第八輯下　“慈覚大師伝”所収

比年及四十。身羸眼暗。知命不久。於是。尋此山北洞幽閑之處。結艸為菴。絶跡待

終。今之首楞厳院是也。俗曰横河矣。蟄居三年。錬行彌新。夜夢。従天得薬。其形似瓜。喫之半片。其味如蜜。傍有人語曰。此是三十三天不死妙薬也。喫畢夢覚。口有余気。大師心怪。自特焉。其後疲身更健。暗眼還明。於是。以石墨艸筆。手自書寫法華経一部。修行四種三昧。即以彼経。納於小塔。安置堂中。後号此堂。曰如法堂。

㊟２４、『比叡山と天台の美術』比叡山開創一二〇〇年記念　東京国立博物館他編　一九八六年

㊟２５、「銅板法華経・付銅筥板」田口榮一『國華』九五七号　一九七三年

㊟２６、『築上郡史』築上郡史編纂委員会編纂　臨川書店　１９８６年復刻版

㊟２７、「求菩提山縁起」は求菩提山祐官坊祐瞬によって享保１２年（１７２７）に作成された。『山岳宗教史研究叢書１８修験道資料集Ⅱ』西日本編所収

㊟２８、『慈圓の研究』多賀宗隼　(株)吉川弘文館　昭和五十五年所収

㊟２９、『大正新脩大蔵経・図像篇第九巻』１１０頁下段二行～七行

㊟３０、『佛教芸術』第二百八号、平成五年

㊟３１、『平安遺文』金石編・増補　東京堂出版　竹内理三編　昭和５１年所収

㊟３２、建保元年癸酉（一二一三年）編　『山岳宗教史研究叢書１８修験道資料集Ⅱ』西日本編所収

㊟３３、『大正新脩大蔵経・図像篇第四巻』曼荼羅集参考図像No.２３・二一七頁

㊟３４、『大正新脩大蔵経・図像篇第四巻』曼荼羅集参考図像No.２８・二三二頁

㊟３５、『大正新脩大蔵経第一二巻』所収

㊟３６、『大正新脩大蔵経・図像篇第三巻図像No.４・六八〇頁

㊟３７、『大正新脩大蔵経・図像篇第三巻図像No.２１・一〇〇頁

㊟３８、『原色版国宝４　平安Ⅱ』　文化財保護委員会監修　毎日新聞社「国宝」委員会事務局編集　毎日新聞社発行　昭和４２年１６４頁　金銅藤原道長経筒（銘文）より

「南瞻部洲大日本国左大臣正二位藤原朝臣道長百日潔
斎率信心道俗若干人以寛弘四年秋八月上金峯山以手
自奉書写妙法蓮華経一部八巻无量義経観普賢経各
一巻阿弥陀経一巻弥勒上生下生成仏経各一巻般
若心経一巻合十五巻納之銅筴理于金峯其上立金銅
燈樓奉常燈始自今日期龍華晨於是弟子焚香合掌白
蔵王而言法華経者是為奉報釈尊恩為値遇弥勒親近
蔵王為弟子无上菩提先年奉書欲賣参之間依世間病
悩事与願違為恐浮生之不定且於京洛供養先了今猶
所以理於茲者盖償初心復始願之志也阿弥陀経者此
度奉書是為臨終時身心不散乱念弥陀尊往生極楽世界
也弥勒経者又此度奉書是為除九十億劫生死之罪證
无生忍遇慈尊之出世也仰願當慈尊成仏之時自極楽
界往詣仏所為法華会聴聞受成仏記其逝此所奉埋之
経巻自然涌出令会衆成随喜矣弟子得宿命通知今日

事如智者之記霊山於前会文殊之識往劫於須臾者歟
嗚呼発菩提心懺無量罪運東閣之匪石加南山之不騫
（中略）
仏聞法之縁弟子道長敬白
寛弘四年丁未　八月十一日　」

㊟３９、日本彫刻史基礎資料集成　平安時代　『造像銘記篇』第五巻所収　姫路市教育委員会文化財課の宇那木氏より資料提供。

㊟４０、『大正新脩大蔵経第九巻』所収

㊟４１、『大正新脩大蔵経第一四巻』所収

㊟４２、金堂本尊薬師如来坐像：重文、鎌倉期。丈六仏（高さ３．１５ｍ）。現宇佐大善寺蔵。

㊟４３、講堂本尊弥勒菩薩坐像：丈六仏、県文。現宇佐極楽寺蔵。

㊟４４、『続本朝往生伝』（十六）真縁上人　大江匡房撰　『往生伝　法華験記』（日本思想体系７）岩波書店　一九七四年所収

㊟４５、室町時代に吉田神社の祠官吉田兼右が著した。
石清水　奥注　山城国久世郡三座式外
三所　応神天皇男体　神宮皇后女体
玉依姫
伝燈大法師
「貞観元年四月十五日奉宣行教和尚　参籠宇佐宮同年八月廿三日帰京　奏神告之由
同九月十九日於男山峯建立御殿六宇三宇正殿礼殿　自尓以来鎮座当山
本地　阿弥陀　観音　勢至
又云　石清水御事

㈥　結語

我国は、永承二年（１０５２）に末法の世を迎えるとされ、求銅板法華経と銅筥の埋納もそうした時代背景と無関係ではなかろう。『託宣集』神亀２年（７２４）一月二七日に、

「神吾未来の悪世の衆生を導かんが為に、薬師・弥勒二仏を以て、我が本尊と為す。」

と託宣している。これは、八幡神の信仰の中心を薬師、弥勒におき、それぞれの本願、誓願を悪世（末法と置き換えられるだろう）において、現世（薬師）から未来（弥勒）にかけて現当二世の救済を実行すると宣言したものと言えるであろう。

天台大師智顗の五時教判では、法華経を釈迦の説いた最高の教えと位置付けており、この伝統は最澄の天台宗へと受け継がれている。未来悪世の衆生への仏教の至上の教えである法華経の伝承と八幡神の衆生済度のメッセージが、銅板法華経と銅筥に描かれた尊像に込められて埋納されたのではなかろうか。

最後に、本論考を書く端緒になりましたのは先年城井神社の祭典で後藤市長にお会いした折に、何くれとなく心遣いをして頂いている豊前の人士の皆様に少しでも何等かのお返しをしたいと言う感謝の意をお伝えしておりました。

拙い小論ですが、何かのお役に立てれば本望です。この小論が豊前市の弥栄の一助となれば幸いです。

本論文作成において、恩師である錦織亮介先生、姫路市教育委員会の宇那木氏、真言宗山階派川原修一教学主任に御礼申し上げます。

殊に、真言宗大本山勧修寺門跡筑波遍猊下、総本山一畑薬師教団の飯塚大幸管長猊下にお力添えいただいたことに衷心より感謝申し上げます。